「富坂プレディガーゼミナール」準備会

教会が新しくされるために
～富坂プレディガーゼミナールとキリスト教のスピリチュアリティ（霊性）

星野　香

はじめに

2022年度から始まった、「指導者養成講座（富坂プレディガーゼミナール）準備会」は、そのパイロットプロジェクトを2024年2月27日～29日の二泊三日で開催する予定である。この講座の必要性と方向性および構想については、『富坂キリスト教センター紀要　第13号』に、三村修氏と富坂キリスト教センター主事・岡田仁氏がすでに述べているが、準備会は日本には未だ無い「牧師あるいは牧師のような役割をしている人々」のための継続教育の場をつくろうとしている。

牧師としての働きは多様であり、対応する問題も多岐にわたる。個人的問題や社会問題、災害、人権や環境問題、DVやハラスメント、裁判事など幅広い。且つどの案件も全く同じではなく、実際に対応してみなければ分からないことも多い。牧師だからこそ直面する日々の課題には、実務処理も必要であるし、苦しみや困難を抱えている人々へのケアも重要である。つまり牧師は、人の生活と「生きることと死ぬこと」、そして人の死後の命に関わりを持ち続け、援助を求める人々に寄り添い、ケアを行うことを求められる。

一方で、「求められる理想像」と「現在の自分」とのギャップに悩むこともあるだろう。自分の弱点に納得できず、克服すべきだと考え、いつのまにか自分自身を追い込んでしまうことや、複雑な対人関係に悩むことも少なくない。強い召命感を持つが故に熱心になりすぎて、突然燃え尽きてしまったような精神状態になることもある。

寄せられる信頼と期待に答えて、相手の意とする援助ができるか否かで、牧師への評価も変わり、また自分自身への肯定感も違ってくるだろう。同労者として共に歩んでいたはずの仲間が牧会の現場から、一人去り、二人去り、と消えていく現実があり、逆に成功体験によって牧師の教会における「権威ある立場」を自身の拠り所としてしまう誘惑にさらされる。

私たち信仰者は神に従う者である。神は私たちの弱さも欠けもご存知の上で用いられる。決して、人間が権威ある立場になって「神のように振る舞う存在」に

なるためではない。牧師もまた、霊的養いを受けるべく援助を求める者であり、ケアを受ける必要性があるのである。自分のケアをすることができる者が、牧師として他者をケアすることができるのではないだろうか。

教会が抱えている問題は多い。ひとときでもこうした継続教育の場において共に「み言葉に傾聴」し、苦労や喜び・経験を分かち合い、「共同の学び」と「共同の生活」において魂の養いを得ることは牧会する者にとって大切なことであろう。それは教会が新しくされ、「世のための教会」として生き生きと輝くための養いのひとつになると考えるからである。

1. 継続教育の軸となるキリスト教のスピリチュアリティ（霊性）

準備会が提供しようとしている継続教育「指導者養成講座」は今後、必要に応じて更に広がりを持ったものになると予測される。だが、「霊性」無くして、これは成立しない。岡田氏は、これまでの富坂牧師研修の歩みについて触れ、「富坂牧師研修制度の基本姿勢」を当時の記録から概観して記している。以下はその抜粋（前述紀要第13号）だが、「単に知的な研修、グループ（教派的、同士的な）研修ではなく、牧師の生き方、暮らしのことも含めて、相対的に、生活を一定期間ともにしながら霊性を養う。基本は、『神を畏れ、神のみを神とする』 これを軸に行ってきた。」こと、「牧師が主を畏れつつ歩む訓練を積むことにより、知恵を身につけ、練達と勇気と希望を取り戻すことを目的とした研修制度を発足させたい。」と考え、「この研修制度においては、主を畏れることは『小事に忠』（ルカ 16：10）なることから始まることを学びたい。掃除をすること、食事を作ること、朝の祈りと沈黙、あいさつ、人を尊重することなど、共同生活における基本的な『へりくだり』を学びたい。その上にのみ『大事に忠』なる生き方、日本の将来を思い、教会と国家の問題に大胆に発言し、世界と共生する生き方が生まれるのであって、その逆ではありえない。この聖書の順序を身につけていきたい。」とする。

牧会において、基本であると同時に重要なこと、「祈り」「聖書を読む（み言葉に聴く）」「霊的導き」を、牧師も必要としており、霊性を養う機会が求められている。では、「スピリチュアリティ（霊性）」とは何だろうか。

キリスト教のスピリチュアリティ（霊性）

「霊性」という言葉は、「霊」（スピリット）と訳されるヘブル語のルアッハから来ている。この語は、「霊」だけでなく、「息」や「風」といった広い意味を持

つ。そのスピリットについて語ることは、誰かに命や活気を与えるものについて語ることである[1)]。創世記1章2節で、「神の霊が水の面で動いていた」（新共同訳）と記されるとき、「霊」は、「息」「風」とも訳し換えることができる。人の身体的なものと「魂」という非身体的なものは切り離すのが難しく、厳密な区別がないことがヘブライ的表象である。神の霊あるいは神の息は、神の言葉とともに働き、神が語ることは現実となる。神の息が吹き込まれると、それは命を生き始める。このように「霊性」は、信仰の命に関するものであり、それを推進し生気を与える。また、それを維持し発展させるのに役立つものである。

霊性は、人の宗教的信仰の現実生活と関わる働きであり、その信念に基づいて行動するところのものだ。キリスト教信仰の基本的考え方は、その霊性にとって重要なことだが、これはただの考えに終わるものではない。霊性はキリスト者の生活が始まり、その生活が営まれるような「道」に関するものであり、且つ神のリアリティを充分に理解するために必要なものである。それゆえに多くの場合、神との関係を達成し維持する共同の礼拝と私的祈り、個人の霊的生活を含み、教え、説教等、その要素となるものは幅広い。そして現実のキリスト者の生活の中で与えられる、これらの実りをも含むのである[2)]。

福音書からたどるイエス・キリストの行い・祈り・教えとスピリチュアリティ

スピリチュアリティ（霊性）が、人を変える力を持つものとすれば、キリスト教のスピリチュアリティ（霊性）は、イエスの祈りの生活と行いとその言葉を考察する必要があるだろう。イエス・キリストこそ、キリスト教の原点である。ある人々はイエスに出会い、イエスと生活をともにし、その教えに目を開かれ、彼らはそれまでの自分自身からイエスの弟子へと変えられたからだ。

どのようにすれば、イエスの霊的生活を知ることができるのだろうか。イエス自身はそうした霊的生活を追体験できるようなものを書き残していないし、福音書を通じて知らされてきたことは、イエスの公活動と死と復活の出来事、いやしと奇跡物語、彼の祈りと教えである。福音書の証言の記事から、わたしたちはキリスト教のスピリチュアリティについて、またイエスの姿を通じて、その規範を見出すことは「霊性」を養うための道しるべとなるだろう。なぜなら、「神の霊によって導かれる者は皆、神の子」（ローマ8：14）であるからだ。

イエスは、「諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた」（マタイ4：23）。安息日に会堂で汚れた霊に取りつ

かれた男をいやし（マルコ1：23-26）、手の萎えた人をいやし（ルカ6：6-11）、罪深い女を赦した（ルカ7：36-50）。マルコ福音書1：14-15には、「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えて、『時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい』と言われた。」とある。これは、イエスの宣教活動と教えの内容が一言でまとめられていると言われているが、つまり、神こそが世界を創造され、真の王として世界を支配される方なのだと宣言し、神の正義が人々と社会全体を統治するのが「神の国」であり、これを信じる信仰によって神の支配を受け入れる民において実現する。イエスは、この「神の国」に関して多くのたとえを用いて教えられた。彼の悪霊追放の業も「神の国はあなたたちのところに来ている」（ルカ11：20）しるしなのだとして、人々を悔い改めに招いたのである。

そして、祈りについて見ていこう。汚れた霊に取りつかれた子をいやす物語では、不信仰な弟子たちの問いに「この種のものは、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」（マルコ9：29）と教えている。またイエスはエルサレムへ上って行くと、神殿の境内に入り、神殿は「すべての国の人の　祈りの家と呼ばれるべきである」（マルコ11：17c）として、商人たちを追い出してしまう。ルカ福音書は、彼が十字架の死を前にしても、悔い改めた犯罪人のためのゆるしを祈り（ルカ23:42-43）、死においても「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」（ルカ：23：46）と祈ったことを記している。

福音書は、それぞれ書き方に特色があるが、どれにも父なる神に祈りをささげるイエスが描かれている。ガリラヤで伝道をはじめ、四人の漁師を弟子にした後も、「朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。」（マルコ1：35）と記し、「近くのほかの町や村へ行こう。わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」（マルコ1：38）とイエスは弟子たちに告げる。これは、イエスが祈りの中で、つねに神に自分の使命を問い、なすべきことに従っていったと言えるだろう。

旧約において、荒れ野は神との出会いの場である。イエスは何か重要なことを行おうとする時、人里離れた場所（荒れ野）や山へ上り、神に祈った。イエスの祈りと行動は絶えず神との交わりと結びついており、イエスの行う業はつねに祈りに伴われている。こうしたイエスの模範が他者に霊的な影響を与えたことは確かだと言えるだろう。

神と向かい合う時間　ー サバティカル、リトリートは神の生み出したリズム

牧師として、あるいは人を援助する側の立場の人間にとって、相手を十全にケアすることは難しい。深夜に鳴り続ける電話の対応や障がいを持つ人からの相談や教会内の人間関係など、より専門知識が求められることも少なくはないが、知識だけで対応できることではない。隣り人に仕えることは力を消耗することでもある。マルコ福音書は、イエスのそのようなときの様子を5章25節から30節に記している。「さて、ここに十二年間も出血の止まらない女がいた。多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであった。イエスのことを聞いて、群衆の中に紛れ込み、後ろからイエスの服に触れた。『この方の服にでも触れればいやしていただける』と思ったからである。すると、すぐ出血が全く止まって病気がいやされたことを体に感じた。イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいて、群衆の中で振り返り、『わたしの服に触れたのはだれか』と言われた。」

イエスは福音宣教のために、人々に教え、人々をいやし、悪霊を追い出すために、ひとりで祈る時間と場所を必要とした。またイエスが任命し派遣した弟子たちが最初の宣教から戻ったときも、彼と同じようにするようにと、彼らに「人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」と言われた。このことは、現代の私たちにも当てはまることである。宣教のために送り出された者もいずれは休息が必要である。神御自身が安息日を守られた。人は、神と向き合い、力を得なければ、神の示される先に進むことができない。そのために欠かせないのが祈りである。

〈祈りとは、私たちがともすれば考えがちなように、自分の願いを神に捧げるということだけではない。むしろ、より根本的に、祈りは人間が自分を神の前に置くこと、神に生かされていることに改めて立ち戻ること、神との交わりであり対話であると言ってよい。いわば人間が生きるために呼吸が必要なように、神によって造られ、神に向けて造られた人間が、神のいのちに生かされ、神の前で成長するためには、祈りという呼吸が必要なのだということ、これは古今東西を問わず、すべての宗教者たちに共通の経験である。〉（『キリスト教の原点　－キリスト教概説Ⅰ－』　百瀬文晃著　P103）

このような祈りの時を日々確保している牧師がどれほどいるのだろうか。ただ祈る時間を得ればよいわけではない。聖書の御言葉に耳を傾けるための時間は限

られ、やらなければならない仕事の山に追われる毎日なのが、実際のところだろう。こうした継続教育が必要だと言われながらも日本においては未だ無いのは、その必要性があまり認識されていないところにあるのではないだろうか。「二、三日も教会を留守にできない」「教会から参加への理解が得られない」など諸事情はあるだろうが、ボンヘッファーの言う「外なる奉仕のための最も内的な集中」のために、この富坂プレディガーゼミナールを霊的な養いと牧師訓練の場として用いていただきたいと思う。

2.「社会倫理と黙想、礼拝、祈りの4つの柱」と霊性を養うプログラム

岡田氏は、ディートリッヒ・ボンヘッファーのフィンケンヴァルデにおける「共なる生活」のモデルはいまなおドイツ・プロテスタント教会や各州教会のPSに少なからず影響を与えている、と語る。

1935年4月から始まったボンヘッファーの告白教会牧師研修所（PS）の所長としての生活は、彼の年来の考え方と構想を実現するべき機会になったとされる。フィンケンヴァルデの第一期生たちの夏休みが終わった9月の初めに、ボンヘッファーは彼らと一緒に、このPSの設立者である古プロイセン合同教会評議員会に対して、「兄弟の家（ブルーダーハウス）」の設立のための公式提案をした。「この福音主義的な兄弟の家」の構想は、その内容も表現もユニークで新しいものだった。

「ボンヘッファーは、このブルーダーハウスの目的とするところを、『設立への提案』の『基本的考察』において以下のように述べている。

1. 今日、宣教の責任は、教会に仕える個々の牧師にとって特別に重いので、宣教の内容的検討と課題遂行の両面において、牧師相互の交わりによる助けが必要とされている。各人が孤立していては、この課題を果たすことができない。しかもそこでの交わりは、ただその時々の協議会や共同の礼拝の程度では十分ではなく、一つの・よく秩序づけられ・整えられた継続的な共同生活というかたちを必要としている。
2. このような形でのキリスト者の生活は、より若い世代の牧師たちの間から、新しくその課題が自覚されて来ている。今日のキリスト教信仰への問いへの答えは、決して抽象的な言葉によってだけなされるのではなく、共同の生活への具体的な試みと、キリストのいましめに対する共通の自覚からのみなされうる。キリストのいましめに対する服従という共同の訓練の実際的な試みによってのみ答えられる。

3, 現在ならびに将来の教会闘争を戦い抜くためには、たとい牧師に与えられている経済的その他の特権を放棄してでも、宣教の課題に応えうる、完全に自由で、献身への訓練の行きとどいた牧師の集団が必要とされている。そこで目標とされているのは、修道的な隠遁の生活ではなく、外に向かって自由に奉仕するための、内的に最も深められた生活である。
4, 教職という職務にある牧師たちは、常に『霊的な避難所』（ein geistliches Refugium）を必要としている。彼らは時々そこへひきこもり、きょうだいの交わりにより強められてまたそれぞれの奉仕の場へと赴く。
5, 共同の生活は、聖書のみ言葉と祈り、きょうだいの励まし、自由な個人的な告解（罪の告白）、共同の神学研究、必要最低限の単純な共同生活によって導かれ、この生活共同体の中で結ばれ支えられたきょうだいたちは、各人に与えられた召しに応じて、教会への奉仕の業に赴くのである。退所する自由は常に開かれており、入所者は全員によって決定される。その人数はあまり多くないことが望ましい。」（『共に生きる生活』 D. ボンヘッファー著　森野善右衛門訳　解説より）

このフィンケンヴァルデの共同生活に基づいて、より一般化してキリスト者の交わりのあり方を問題にして書かれたのが、ボンヘッファー著『共に生きる生活』である。

もちろんこれらをすべて継承・実行できるわけではないが、準備会が目指す共同生活とその交わりの本質が示されていると考える。特に2010年9月にドイツから来日されたクラッパート教授が、岡田氏に「社会倫理と黙想、礼拝、祈り。これら告白教会PSの4つの柱を、将来の富坂プレディガーゼミナールでもぜひ継承してほしい」と語ったことも印象的だ。神はいつでもどこにでも御計画のために聖霊の導きを送ってくださる。なぜならば、筆者自身は同時期に偶然クラッパート教授と出会い、交わりの時を得たからだ。教授はキリスト教の信仰を持つことになったきっかけや家族のことを尋ね、聖書のことや神がどのようなお方であるかを熱心に話してくれた。この出会いがなければ、筆者は神学校に行くこともなく牧師にもなっていなかったし、こうして富坂プレディガーゼミナール準備会に関わることもなかったと思うと不思議である。

今回のパイロットプロジェクトでは、前述の4つの柱と共に、「み言葉への傾聴」

「共同の学び」「共同生活」を大切にして進められる。開会礼拝から始まり、夕に朝に昼に祈りと黙想の時を持つ。特に牧師は何かを始める前、他の人々から祈りを求められることがよくある。例えば教会行事を開始する際に祈りをささげたり、招待された儀式的集会において「祈祷」することが式次第に記されていたりする。まるでスタートのかけ声のように、最初に語られる言葉が人間の祈りであってはならない。第一にあるのは「神の言葉」「み言葉」であり、祈りは神への応答だということを理解しなければならない。「偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる」(マタイ6:5)、「だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる」(マタイ6：6) と、イエスが教えてくださっていることを学びたい。

神との交わりであり対話である「祈り」においてさえ、私たちはその意味を忘れ、自己が日常的に意識している事柄を優先して祈りを始める。私たちにまず話しかけてくださったのは神であり、聖書的な根拠に立って、どんな人間の言葉よりも神の言葉が先行していることを意識するように努めるべきである。そして、私たちが神への応答としての言葉を学ぶことができるのは、詩編である。今回のプログラムの中にも詩編を共に分かち合い、賛美する時を設けている。詩編はイスラエルにおける祈祷書であり、イエスにとってもそうであった。詩編の編集作業は少なくても数世紀間にわたって継続されていて、当時のイスラエルにおいて「祈り」は大きな注目を集める事柄だったという事実と結びつく。彼らにおいては、人生の様々な状況下にあっても、人間が神に応答できるようにするために、祈りの教育や訓練方法を人々に提示することが非常に重要なことと考えられていた[3)]。それゆえにキリスト者も長い年月にわたって、詩編において神に応答すること、祈ることを学んできたのである。現代の私たちにとっても「祈り」を成長させるために詩編の学びは重要である。

また牧会上の経験を共有する場においては、それぞれの体験談に傾聴し、対話することによって、他者においてキリストに出会うことになるだろう。重荷を分かち合うこと、共感すること、「隣り人である」よりも「隣り人になる」ことの大切さを経験してもらいたいと思う。

他には「労働の時間」「食事作り・食事準備」というプログラムもある。これは短期間ではあるが共同生活を通して、一つのコミュニティを形成することを目指すものだが、考え方の違いや神学的見解の違いなどによる不和が起こるかも知れ

ない。大概は「数日のこと」としてやり過ごしてしまうかも知れないが、「神を畏れ、神のみを神とする」者たちとして、「主にあって一つになる」ことができればよいと考える。戦うことよりも、相手を理解することが求められるだろう。正義を振りかざしても相手に分かってもらえるとは限らない。たとえ自分とは真逆な考えであったとしても、いったんは受けとめることも関係性の構築に役立つはずである。誰かのために用意する食事のお皿の置き方さえも、その人の心がどのようにおかれているのかを神は見ておられるのだと意識したい。

おわりに

富坂プレディガーゼミナールでの霊性の養いの面から「霊性」および「キリスト教の霊性」を述べてきたが、これは限定した一部のことでしかない。なぜなら「霊性」を定義することは簡単なことではないからだ。キリスト教の信仰と霊性には多様な類型があり、その根本をなすキリストについての理解や受け入れ方はひとつではなく、またそれによる信仰の告白や生き方の表わし方も多様だ。A.E. マクグラスはその著書『キリスト教の霊性』において、次のように述べている。

〈「キリスト教の霊性」という用語は一つの定まった定義があるように見えるかもしれないが、実際にはキリスト教そのものが複雑で多様な宗教である。使徒信条などの広く受け入れられている信条にまとめられているように、キリスト教信仰の「核」となるものがあることは広く合意されているにしても、基本的信条の解釈についてキリスト教内部でも実に多岐にわたっている。特に教会政治とキリスト者の生活についての解釈は様々である。また、キリスト者の一人一人の個性によってもその霊的な好みには違いが生まれる。〉

つまり、キリスト教の霊性を探究しようとすれば、その中の類型について知ろうとすること、人格的事柄、教派的理由、この世とその文化、歴史に対する態度といったことも霊性との関連で重要な点である。このような簡単な分析からでも、個人的気質と社会環境は霊性との関係で切り離すことができないのは明らかである。ようするに、キリスト者と同じ数だけの霊性がある、と言うことができるだろう。それぞれのキリスト者が、各個人特定の環境の中でキリスト教信仰に応答しているのである。人は誰でも唯一の存在であり、牧師も唯一の存在である。全く同じ人はいないのだ。

しかしながら、牧師は神と世界の間に立って、人と人の間で働くものである。牧師が対話を求められるのは、相手が意識していなくても神との交わりを維持す

ることを願っているからではないか。誰でも助け手を求めている。助け手を指し示す役目の牧師も助け手を探している。この講座が「神を知り、体験する」霊的な恵みに満たされるものであるようにと願っている。

〈註〉

1) A.E. マクグラス著　稲垣久和　岩田三枝子　豊川慎訳『キリスト教の霊性』(2006年) 教文館 p17。

2) 同上書　p18。

3) E.H. ピーターソン著　越川弘英訳『牧会者の神学　祈り・聖書理解・霊的導き』(2016年) 日本キリスト教団出版局　p73。

〈引用・参考文献〉

『キリスト教のスピリチュアリティ　その二千年の歴史』 G. マーセル他著　青山学院大学総合研究所訳
『キリスト教の霊性』 A.E. マクグラス著　稲垣久和　岩田三枝子　豊川慎訳
『牧会者の神学　祈り・聖書理解・霊的導き』 E.H. ピーターソン著　越川弘英訳
『キリスト教の原点　－キリスト教概説Ⅰ－』 百瀬文晃著
『共に生きる生活』 教会と宣教双書2　D. ボンヘッファー著　森野善右衛門訳
『富坂キリスト教センター紀要　第13号』